SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

世界で一番ゴッホを描いた男

2016 年／中国・オランダ映画
配給：アーク・フィルムズ／スターキャット／84 分

2018（平成 30）年 9 月 10 日鑑賞　　ギャガ試写室

Data
監督：ユイ・ハイボー／キキ・ティンチー・ユイ
出演：趙小勇（チャオ・シャオヨン）

みどころ

徳島県の鳴門には、私が 2017 年 4 月に見学した世界初の陶板名画美術館として有名な大塚国際美術館がある。しかし、中国の深圳の大芬は油画村であるらしい。そこでは 1 万人を超える画工がおり、毎年数百万点の油絵が世界中に売られているというからすごい！

その画工の 1 人で、20 年間ゴッホの絵を描き続けてきた趙小勇の願いは本物のゴッホの絵を見ること。大金持ちになった中国ではそんなことは容易だと思っていたが、意外に複製画販売の仕事は 3K（きつい、汚い、危険）で旅費の捻出にもコト欠くらしい。しかし、無理をして見学してみると・・・。

職人？それとも芸術家？本作後半にみる、それを巡る中卒（本当は中 1 で中退）の主人公の言葉の説得力にびっくり！地味な映画だが、こりゃ必見。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■中国は広い！面白い！深圳の大芬には油画村が！■□■

中国の深圳（シンセン）は 1980 年代の鄧小平による改革・開放政策によって創られた街だが、そこには大芬（ダーフェン）という世界最大の油画村があるらしい。1989 年に香港の画商が 20 人の画工を連れてきたのがこの街の始まりで、現在画工の数は、1 万人を超えるらしい。毎年、数百万点の油絵が世界中へ売られていき、その総額は 2015 年で 6500 万ドルを超えているそうだ。私の事務所がある大阪市北区には老松町と呼ばれていた通りに骨董街があり、今でも結構繁昌しているが、スクリーン上で観る大芬の街の規模とは大違い。中国と日本では何でも 10：1 の比率で比べれば程々だが、複製画（レプリカ）作りという産業では、日本はもちろん世界のどの街も深圳の大芬と比べ物にならないことがよく

わかる。

本作の主人公である趙小勇（チャオ・シャオヨン）を中心としたドキュメンタリー映画である本作を監督したのは、ユイ・ハイボーとキキ・ティンチー・ユイの父娘。ユイ・ハイボーは本作が長編監督デビュー作だが、映画監督と同時に深圳経済日報チーフフォトエディター・深圳プロカメラマン協会の代表を務めるなど中国におけるシュールリアリズム写真の先駆者と評価されているらしい。そして、娘のキキ・ティンチー・ユイは中国上海交通大学の USC-SJTU 研究所の映画科で助教授として教鞭を執る才媛だ。

本作には趙小勇たち家族が久しぶりの休暇を"世界の窓"というテーマパークで楽しむシークエンスが登場する。そこは私も 2004 年の杭州・深圳・広東旅行で楽しんだ所で、8 つの区域に別れた 48 万㎡の敷地内には、パリのエッフェル塔やエジプトのスフィンクスなど世界各地の代表的な景観を再現したテーマパビリオンが建てられていた。香港のすぐ隣りにある深圳は素通りしかしていないが、その街の成り立ちは有名だから、私もよく知っている。そんな深圳に、こんな大芬という油画村があることにビックリ！中国は広い！そして面白い！

■□■ゴッホの生きザマは？その作品は？■□■

ゴッホは"ひまわり"や"自画像"等の作品で有名だし、古くは『炎の人 ゴッホ』（56 年）近時は『ゴッホ 最後の手紙』（17 年）（『シネマ４１』末掲載）等で映画化されているので、彼の生き様や作品はよく知られている。生存中は日の目を見なかったものの、死後の彼の評価はメチャ高い。そして、ゴッホの絵はピカソのような抽象画ではないのでわかりやすいうえ、その筆使いに特徴があるので、誰でも模写しやすい。かく言う私も中学１年生から油絵をやっているが、ゴッホの"ひまわり"を模写したことがある。

中卒の趙小勇（もっとも、彼の告白によればそれは少し学歴詐称で、本当は中 1 で中退したらしい）は独学で油絵を学んだだけ。そんな趙小勇が結婚し家庭を持ち、数人の画工を雇いながら曲がりなりにも 20 年間複製画作りのビジネスをやってこられたのは、ゴッホの生まれた国であるオランダの画商をはじめとする複製画の取引が少しずつ拡大したためだ。パンフレットには「複製画のみを手がける絵描きは『画工』と呼ばれ、『画家』と呼ばれるには公募展に 3 回入選しなければいけない。『画家』になると専用の住居に格安で入れるなど優遇政策がとられている」と書かれているが。さて趙小勇は画工？それとも画家？

本作導入部ではユイ・ハイボーとキキ・ティンチー・ユイ両監督が趙小勇の複製画ビジネスの実態を手際よく見せてくれるが、その後本作のメインテーマは趙小勇のある"心の中の葛藤"に移っていく。しかして、今趙小勇が抱えている"心の中の葛藤"とは・・・？

■□■本物を見たい！そうすれば何かが・・・？■□■

日本の夏は暑い上に湿気が多くて大変だが、広東省や深圳はそれがさらに酷い。しかし、

趙小勇の自宅マンションを改造した仕事場は画工たちの寝食の場も兼ねていたが、そこにはクーラーもろくにないらしい。そのうえ、この仕事場で画工たちは夜は上半身裸で眠り、朝起き出すとそのまますぐに仕事にかかるというハードスケジュールだから大変だ。趙小勇はもちろん、彼の妻もそんな生活を毎日続けながらゴッホの絵を描き続けてきたから、趙小勇の家族は10万枚以上のゴッホの複製画を描いてきたことになる。

そんな趙小勇の現在の願いはただ一つ、ゴッホの本物の絵を見たいということだ。オランダの画商からは往復の飛行機のチケットさえ買えば後の面倒は見ると言われているので、ゴッホ美術館はもちろんゴッホのお墓も見学し、ゴッホのすべてに触れてみたい。そうすれば、これからの俺の生き方にも大きな変化が生まれるはず。それが趙小勇の考え方だった。ところが、妻はそんな夫の考えに賛意を示しつつ、「どこにそんなお金があるの？」と夫のオランダ行に異議を唱えたから、アレレ・・・。今や中国は大金持ちになっていると思っていたが、20年間も大芬で複製画ビジネスに励んできた趙小勇でさえ、オランダ旅行の費用にコト欠く有り様なの・・・？

生まれや育ちも大芬であるにもかかわらず、親の出身が出稼ぎだったので都市戸籍がないため大芬の学校へ通う権利がない一人娘は、仕方なく田舎に帰り、田舎の学校に通っているらしい。そのため、本作にはその娘が田舎では方言が全く分からず先生が何を言っているかさえわからないと泣いて訴えていたから、本作を観れば、8月14日に観た中国映画『妻の愛、娘の時』（18年）と同じように、農村と都市間の深刻な格差問題もよくわかる。このように、私たちが知らなかった今の中国のそんな問題に、ビックリ！

■□■まさに〝百聞は一見に如かず。〟趙小勇の変化は？■□■

私は1988年にヨーロッパ旅行に行ったが、オランダは半日しか滞在しなかったため、ゴッホ美術館は見学していない。しかし、高校球児にとって阪神甲子園球場が聖地であるのと同じように、趙小勇にとってそれは聖地だった。厳重な警備（？）を通り抜けて美術館の中に入り、はじめて本物のゴッホの"ひまわり"や"自画像"を見た時の趙小勇の感動は如何ばかりだっただろう。スクリーン上からは趙小勇の「色が違うな・・・」の声が聞こえてくるが、それ以外にもじっとゴッホの本物の絵の前で立ち尽くす趙小勇の胸の中にはさまざまな、思いが駆け巡ったはずだ。

他方、趙小勇はゴッホ美術館の前にあった土産店に、自分が描いた巨大なゴッホの自画像が飾られていることにビックリ！高級な画廊で自分の描いた複製画が販売されていると趙小勇は勝手に想像していたが、オランダの取引先の実態はゴッホ美術館前の土産店だったわけだ。しかも、そこで売られている値段は卸値の約10倍だったから、趙小勇はさらにビックリ！画工では生活できないとして次々と辞めていっている中国の実態を見れば、その取引条件の改定が不可欠だが、さてそこで趙小勇が見せる値段交渉は・・・？

趙小勇は一緒に行った周永久とホテルの中で毎日ゴッホについて語り明かし、また大芬

に帰ってからも身振り手振りを交えて熱く本物の絵に触れた感動を語っていたが、まさに百聞は一見に如かずだ。しかして、その後に起きた趙小勇の変化とは・・・？

■□■職人？それとも芸術家？　この決断に拍手！■□■

２０年間で趙小勇が書いてきたゴッホの絵は１０万枚以上。しかし、彼は自分が模写した絵とゴッホ美術館の中で見た本物の絵は、色はもちろん筆遣いも全然違っていることを実感。また、オランダの街を歩いてカフェの姿を確認し、オランダの青い空を自分の目で見ていく中、ゴッホがいかにそれらを創造的にキャンバスの中に表現したかを模索していくことに・・・。

その結果、自分の田舎ではじめて８０歳になったおばあちゃんの自画像を描くと、まるでピカソが自画像を描いた時と同じ気分でチャレンジすることに。さらに、大芬の街を描くについても、オリジナルな創作意欲で筆を持てば、まるでゴッホと同じ・・・。そう、俺はもう模写する職人(画工)ではない。俺は芸術家を目指すんだ。そんな自覚と意欲が芽生えてきた趙小勇の顔は、今や大きく変化していたからすごい。

他方、周永久は大芬での仕事中にナイフでペインティングする新たな技術を身につけ、ある画商にそのオリジナル性を認めてもらっていたから、これからもその路線を拡大していくことを確認！このようにオランダに行き、ゴッホ美術館でゴッホの本物にふれた趙小勇と周永久の生き方は劇的変化を遂げることに・・・。

中学校を１年で中退した趙小勇のしゃべり方は訥々としており、人を説得しようという意欲など全く感じられない。しかし、ドキュメンタリー映画である本作のマイクの前で語る彼の姿を見ると、本当に誠実にゴッホの絵と向き合っていることがよく分かる。そして、オランダへの旅で彼がなぜ、いかに変化していったのが、本当に説得力を持って私たちの胸を打つことになる。近時のハリウッド映画のような大向こうを唸らせるドラマティックなシーンは何もなく、地味な映画だが、タイトル通りの男、趙小勇の生きザマをしっかり見せてもらい、楽しませてもらい、教えてもらえたことに感謝！！

２０１８（平成３０）年9月１４日記

熱血弁護士

坂和章平

中国映画を語る〈48〉

（さかわ・しょうへい）
１９４９年愛媛県松山市生まれ、大阪大学法学部卒。都市開発に関わる訴訟を数多く手がけ、日本都市計画学会「石川賞」、同年に日本不動産学会「実務著作賞」を受賞。『坂和的中国電影大観』（２００４年）、『ナニワのオッチャン弁護士、映画を斬る！』シリーズをはじめ映画に関する著書多数。（公社）日中友好協会参与、NPO法人大阪府日中友好協会理事。

世界で一番ゴッホを描いた男

深圳の油画村の画工は職人？それとも芸術家？

深圳（シンセン）は鄧小平の改革・開放政策により創られた街だが、そこには大芬（ダーフェン）という世界最大の油画村がある。１９８９年に香港の画商が20人の画工を連れてきたのが始まりで、現在画工の数は1万人超。1年に数百万点の油絵が世界中へ売られ、その総額は２０１５年には６５００万ドルを超えているそうだ。本作は、そこで複製画（レプリカ）を作る画工・趙（チャオ）小勇（シャオヨン）を主人公としたドキュメンタリー映画である。

独学で油絵を学んだ趙小勇が家庭を持ち、数人の画工を雇い20年もの間複製画作りをやってこられたのは、ゴッホの生まれたオランダとの複製画の取引が拡大したためだ。夏はクーラーのない仕事場で上半身裸で眠り、朝起きるとすぐ仕事にかかるハードスケジュールで、画工たちと共に描いたゴッホの複製画は10万枚以上。そんな彼の願いは一つ、ゴッホの本物の絵を見たいということだった。

趙小勇にとって、オランダは聖地。その聖地を訪れ、はじめて本物のゴッホの絵を見た時の感動は、如何ばかりだっただろう。他方、ゴッホ美術館前の土産店に、自分が描いたゴッホの自画像が飾られていたのにはビックリ！　しかも、その値段は卸値の約10倍だったから、さらにビックリ！

しかし、まさに百聞は一見に如かず。彼は、自分が模写した絵と本物の絵は、色も筆遣いも全然違うことを実感。またオランダの街を歩き、ゴッホがいかにそれらを創造的にキャンバスの中に表現したかを模索する。その結果、大芬に戻りオリジナルな創作意欲で筆を持てば、まるでゴッホと同じ！　俺はもう模写する職人ではない、芸術家を目指すんだ！　そんな自覚と意欲が芽生えた趙小勇の顔が大きく変化していることに注目！

訥々と語る趙小勇の姿からは、彼がいかに誠実に絵と向き合っているかがよく分かる。タイトル通りの男の生きザマを見せてもらえたことに、感謝！

原題：中国梵高
監督：ユイ・ハイボー／キキ・ティンチー・ユイ
出演：趙小勇
製作年：2016年、中国・オランダ、84分
配給：アーク・フィルムズ／スターキャット